

## 【特設コラム】 No.2

### 「COVID-19 禍を臨む」

2020年5月20日執筆

Aillis, Inc. 執行役員 Chief Creative Officer  
京都大学博士課程（総合学術，哲学専攻）  
野村将揮

#### 1. 本稿における視点

私は、東京大学文科一類、同文学部を経て総合職（経済区分）として経済産業省に入省し、ヘルスケア産業振興政策等に携わったのち、現在は医療 AI ベンチャーの役員を務める傍らで京都大学の博士課程で哲学の研究に従事しています。

本稿では、幾分か散逸的になってしまっていますが、マクロ経済動向、ベンチャー企業経営、そして哲学といった視点を交えながら、COVID-19 を取り巻く人間の対応（あるいは反応）を多面的に考えてみたいと思います。

#### 2. 記号化を端緒とするメタ次元の脅威

昨今、国内の報道等で「コロナ」という言葉に触れる機会は数知れません。言わずもがな、この形容の元となっている語は「コロナウイルス」ですが、実は、この時点においてすでに記号化という作用が働いているものと考えられます。ある事象に使い勝手の良い名称を付与することで一つの概念として回収する手法は、選挙活動から販促に至るまで世に広く見て取れますが、この回収（すなわち記号化）は、言及される事象が持つ多数かつ多様な意味合いを一つの形容に凝縮させると同時に、具体性を捨象してしまうという両義的な性質を有しています（だからこそその使い勝手の良さもあります）。たとえば、あくまで一例ですが、「9.11」という文字列は多くの人にとって一連の出来事（あえて別の記号を採用すれば「米国同時多発テロ事件」）を想起させる記号となりました。この記号化は、件の事象を一つの「共通経験」として人々の心や無意識に刻み込み、また同時に、個別具体の場面や悲劇を捨象することで、話題として容易に取り扱うことを可能としました（さらに言えば、当該事象が国家的な記憶となった末にナショナリズムの高揚を見たという側面もあります）。「9.11」という記号に相対したとき、私を含む多くの人々は、死者や遺族の表情や感情よりも先に、当時幾度と放映された高層ビルの映像や大統領の発言が想起されることでしょう。

さて、今次の新型の流行以前から、4種類のコロナウイルスが日常的にヒトに感染すること(なお、このほか SARS と MERS もコロナウイルスに該当します)や、流行期にはコロナウイルスが風邪の原因の 35%を占めることなどが報告されていました。「コロナ」という略称は比較的口にしやすい語感を有しており、頻繁に採用される記号と化したことは疑いありませんが、しかしながら、我々が本来的に恐れるべきは、人類がこれまでも長く共存してきた「コロナ(ウイルス)」それ自体というよりも、このウイルスに由来する肺炎等の疾患です(この視点に立てば、既往歴や年代といった属性の重要性が違って見えてきます。)。また、精度が高いとは言い難い検査方法、まだ不透明なままの無症状者の割合(あるいは無自覚のまますでに免疫を獲得した者の割合)、これらを取り巻く言説に翻弄されつつ日々疲弊していく医療現場(さらに、この現場に関する言説)、といった様々な次元の事柄が連関して社会不安を増長させ続けている、この趨勢こそが脅威にほかなりません。言い換えれば、「コロナ」という簡易な記号が氾濫していく中で、高度な複雑性を有する具体の現実以上に、いわば反射的で即時的な意見や世論が支配的となっているこの現状こそが一つの危機にほかなりません(当然ながら、この力学自体は、SNS 等の発展を主たる背景に、COVID-19 の流行以前から政治・経済といった各方面で強く働いていました。)。科学的・医学的なりテラシーの議論以前に、この現状を冷静に俯瞰する知的態度が必要とされているはずなのですが、意外にも、この点はあまり指摘されていません。相まって、さらにメタに言えば、このような態度を社会的に要請または実装する主体が不在であり、記号化されメディアコンテンツとなった部分的事実/フィクションの暴走を制止できないことこそが根深い脅威であるとも感じています。

### 3. マクロ経済動向と記号化

特にインターネット上では、世界的な不況を恐れる声も無数に流布しています。この際、リーマン・ショックと比較する議論も多く見て取れますが(ちなみに、「リーマン・ショック」は世界的には“the financial crisis”と呼ばれることが一般的です。無論、ともに記号化されています)、リーマン・ショックは金融危機である一方で、ここ数ヶ月間の株価等の変動は金融危機と断じるには多分に疑問が残るものです。むしろ、少なくとも現時点においては、ヒトとモノの動きが大幅に制限され、製造業のサプライチェーン寸断や観光業・飲食業の大打撃を見てもなお、金融資本主義が实体经济とは離れた次元で脈動することが再確認された結果となっているように思われます。

無論、これまでの各国の中央銀行や行政の判断が奏功しているという見方もあれば、失業者数や倒産数も実際に増加を見ており、これらの因子に加えてある種のショックが引き金となって金融危機を惹起する可能性も十分にあります。しかしながら、私がここで指摘したいのは、上記のようないわば基本的な整理や切り分けがなされていないままに不況を煽るまたは危惧することこそがデフレーションやスタグフレーションを生じさせ得る因子であり、そしてこの構図は、2.で記した記号化を端緒とする構造的脅威と通底しているということです。

#### 4. ベンチャー業界のリアル

少し離れて、国内のベンチャー市場についても触れたいと思います。近年の盛り上がりで多くの人材が大企業等から流入してきたこと、また、不況を危惧する(またはすでに大きな打撃を受けている)大企業等としては一度ベンチャー業界に身を投じた人材をいま採用するのは様々な意味でハードルが高いこと、ベンチャー企業の方が労働環境において魅力的であること等から、ベンチャー業界内での人材流動性が高まっていくものと考えられます。大企業等との新規事業やオープンイノベーションプロジェクトの組成は、当座は縮小される見込みが高く、これらに関連するコンサルティング業等を軸に置くベンチャー企業も苦境に立たされることが想定される中、すでに特定の市場で確固たる地位を築いているメガベンチャーや、国内外の市場が今後も拡大を続けていくであろう医療や製造業の特定分野(たとえば工作機械や監視制御等)は、他業種からも人材が流入していくでしょう。なお、私が身を置く医療業界においては、多くの医療機関で COVID-19 対応が大きな負担となっており、大企業等を含めて、臨床研究や治験の中断や見送りが数多く発生しています。既に臨床研究や治験を終えている製品等については(厳しい中でも)UI/UX(ユーザーインターフェース/ユーザーエクスペリエンス)の作り込みや販路体制・販売体制の構築に注力する戦略も採用し得るものの、設備投資や消費への選好性が総じて低下しているため、正念場が続いていきます。他方で、資金調達環境について考えると、事業会社等からのベンチャー投資が鈍化することは容易に想像できるものの、ベンチャー投資それ自体を存立意義とする VC(ベンチャーキャピタル)については(選別基準が一層厳しくなるにしても)積極姿勢は概ね維持されとも考えられ、上記した特定分野のベンチャー企業のうち採用競争で勝ち残った者は事業ブーストの機会に恵まれ得るとというのが今日時点での私感です。

#### 5. 「コロナ」とは何かを考えたときに

本稿は COVID-19 をめぐる社会情勢を俯瞰した上での文字通りの雑感でありましたが、あえて趣旨をまとめるならば、①ウイルス、ウイルス由来の疾患、これらを取り巻く反応、複雑系そのものである現実、がすべて「コロナ」という一語で収斂・記号化されている現状がある、②「コロナ」という記号が氾濫を続ける中で、部分的事実/フィクションの暴走を制止する主体が不在であることこそがメタ次元の根深い脅威である、③マクロ経済動向をめぐる世論や不安においても、上記と通底する構図を見出すことができる、④ベンチャー業界ひとつ取っても、力学や作用は(本稿記載のものより遥かに)具体的かつ複雑系である、といったものであります。

翻って、「コロナ」という言葉が宙を舞ったのちに山積していく今日日の情報化社会において、自らの足元を見据える知的態度を持てるよう、努めて自覚的でありたいと感じている初夏の京都での日々であります。他方で、ゆうに千年以上の歴史を有する寺社群を傍目に東山や鴨川沿いを歩いていると、記号化された現実を余所にして季節を運ぶ新緑の尊さに、自意識を超えたある種の畏敬を禁じ得ない心持ちになりもします。

【了】

**【略歴】**

野村将揮(のむら まさき)

平成元年生、30歳。東京大学文科一類、同文学部、在学中の国家公務員試験(経済区分)合格を経て経済産業省入省。福島復興、外為法の運用・改正、ヘルスケア産業政策等に携わる。平成30年11月に医療AIスタートアップ Aillis, Inc.入社(執行役員)、令和元年7月より現職。

NewsPicks 専門家コメンテーター(Pro Picker)、経済産業省 WG 有識者スピーカー、大阪府有識者委員等を歴任、ダボス会議 Global Shaper 選出、St.Gallen Symposium “100 Leaders of Tomorrow” 選出ほか多数。令和2年4月より京都大学博士課程(総合学術, 哲学専攻)在籍中、剣道歴24年(四段)。